

高等教育研究センター

かわらばん

春号

名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第42号

仕事帰りに図書館に立ち寄ってみませんか

名大の中央図書館が変身しつつあります。2009年秋には協同学習スペースとしてのラーニングコモンズが整備されて、今ではさまざまな講演会やセミナーが企画・開催されています。玄関ロビーには人気のカフェも入店し、待ち合わせ場所、交流サロンとしても使われています。今年度には玄関横に各種セミナー用のスペースが設置される予定です。かつては古書の保管庫のようにみなされていた中央図書館は、協同学習の場、学術交流の場へと進化しつつあります。

その一方で、電子ジャーナルの普及に伴い、研究に必要な学術論文の多くは研究室にいなからインターネットを経由してダウンロードできるようになりました。この傾向は特に理科系の学問分野において顕著なようです。教員の中央図書館への入館者数を1993年と2011年で比較したところ、理学研究科では66%減、工学研究科では57%減となっています(ただし、この間に両研究科は改組されており、教員数が大きく変化して

いる点に留意すべきですが)。国際的な電子ジャーナルが多様に発行されている理科系の諸分野では、必ずしも図書館に足を運ばなくても研究活動には困らない時代を迎えています。それゆえに教員は最近の図書館の変化に気づきにくくなっているかもしれません。

実際のところ、中央図書館の利用者の約8割は学部生です。年間の利用状況をみると、前期試験のある7月と後期試験のある1月が繁忙期で、休み期間中の9月と3月には閑散としています。名大生(学部生)の中央図書館利用率は一人当たり年間約40回程度です。平均すると週1回にも満たないのです。ラーニングコモンズが整備される前と比べると、彼らの利用頻度は1割程度増えています。それほど顕著な変化ではありません。このことは、ハード面を整備するだけでは図書館の利用度が飛躍的に向上するわけではな

いことを示しています。

学生が図書館をもっと有効に活用するためには、各教員が授業や研究指導を通じて学生に図書館の利用を促すことが鍵になると思われます。たとえば、授業時間外の課題をシラバスに明記して、さまざまな文献を駆使して学生が予習・復習をせざるを得ないような仕組みをつくれれば、彼らの足はおのずと図書館へと向くのではないのでしょうか。

あるいは、夏休みなどの長い休暇に入る前には、各分野の必読書とも言える基本文献や副読本を図書館に揃えておき、学生に目を通しておくことを勧めてみてはどうでしょうか。

残念ながら、これまでの日本の大学では、教員と図書館職員は比較的疎遠な関係にありました。長い間、図書館職員の支援対象は、窓口をやってくる一部の学生に限られていました。一方、教員側にとっても研究・教育活動において図書館のリソースをどのように活用できるのかを知る機会に限られていました。対照的に、アメリカの主要大学は専門分野別にリファレンスサービスを提供する、いわゆる「サブジェクト・ライブラリアン」を数多く擁しています。彼らが各部署の教員や大学院生と大学図書館をつなぐ架け橋のような役割を果たしています。こうした手厚い仕組みは日本の大学で一朝一夕に実現できるものではありませんが、我々にもできるシンプルなことからは始めようではないでしょうか。たとえば、各部署で大学院生を対象にこうしたリファレンスガイド役を養成して、学部生の学修支援を図ることができるかもしれません。

事務職員の能力開発の場としても、図書館は大きな可能性を秘めています。中央図書館の利用者のうち職員が占める割合は1%未満でしたが、この5年間で利用者は2倍以上に増加しています。職員の自主的な勉強会も図書館で開かれるようになりました。業務に直結する専門的な研修は部署別に行われていたのですが、図書館を個人としての全人的な能力開発やリフレッシュの場として利用すると、既存の研修プログラムとの相乗効果を得られるかもしれません。せっかく大学に勤めているのだから、仕事帰りに図書館で好きな本を借りて、カフェで読んでみるのも悪くないですね。

まずは教職員が仕事のついでに図書館に足を運んで、自身の能力開発に活用してみようではないでしょうか。思わぬ発見があるかもしれません。

(近田政博)

2012年度名古屋大学学生論文コンテストの表彰式を開催

2012年度名古屋大学学生論文コンテストの表彰式が、2013年3月7日(木)、附属図書館会議室において開催されました。同コンテストは、学部生に「論理的な文章を書く経験」を奨励することを目的として、高等教育研究センターと教養教育院が主催しています。今回は過去最多となる40本の投稿論文の中から、山本一良理事、佐野充附属図書館長、戸田山和久教養教育院副院長、早川義一高等教育研究センター長による審査の結果、次の6論文が優秀賞に選ばれました。受賞した論文は、本学の学術成果として名古屋大学学術機関リポジトリに登録されます。

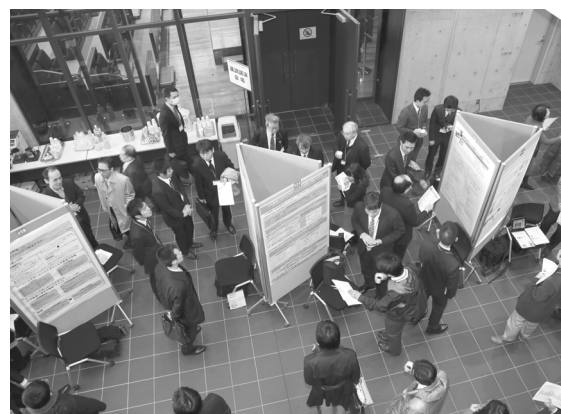


- 「大学生の持つ“ひとり”の認識～積極的孤独と消極的孤独～」 文学部1年 吉川千尋さん
- 「痴漢冤罪の昏き闇 一正しく裁かれる世界へ」 法学部1年 川浦翔太さん
- 「ケアから探る、今を生きる意味」 医学部2年 新藤さえさん
- 「“和声”が伝える音楽の癒しとは? 『トロイメライ』についての考察」 医学部5年 金山知弘さん
- 「国際秩序観の相剋としての日清戦争」 医学部5年 山田悠至さん
- 「書籍再販制の展望」 法学部1年 土屋遼准さん

「大学教育改革フォーラム in東海2013」を開催しました

2013年3月2日(土)、「大学教育改革フォーラム in東海2013」が、名古屋大学東山キャンパスES総合館と中央図書館にて開催されました。8回目の開催となる今回は、参加者397名を数え、過去最大の活況を呈しました。

フォーラムは、基調講演「学生の主体的学びをどう促すか」(国立教育政策研究所・川島啓二氏)で幕を開け、9つのオーラルセッションでは、大学職員の学びと実践、理系教養教育、協同学習の場としての大学図書館、教務の実践的知識の共有、大学経営と評価、教養・基礎教育、課題解決型学習、学生・学習支援、IRといった多岐にわたるテーマが掲げられ、パネリストによる報告をもとに活発な議論が交わされました。ランチタイムには、物理学講義実験研究会によるミニワークショップ、ポスターセッションが同時開催され、32件のポスター発表から参加者投票による優秀ポスター賞の選出が行われました。情報交換会では、愛知県立大学教職員によるダンスパフォーマンスの披露もあり、賑やかな相互交流となりました。



かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメール
アドレスまでお寄せください

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

アクティブ・ラーニング Active Learning

アクティブ・ラーニングとは、学生の主体的・能動的な参加を重視した教授・学習の方法や形態のことです。中教審答申(2012年8月)でその実施の必要性が強調されるなど、大学関係者の間で普及しつつあります。「能動的学修」などの訳語が用いられますが、しばしば「アクティブ・ラーニング」がそのまま用いられています。同答申では「ディスカッションやディベートを取り入れた双方向の講義、演習、実験、実習・実技等を中心とした授業」としています。このような学習・授業は、名称・形態・内容とも多様です。双方向型学習、学生参加型学習、自律的学習、さらには問題解決型学習、課題探求型学習、問題発見学習(その具体例としてPBL学習など)等も、この範疇に含むことができます。

「学習」とは、「経験によって新しい行動傾向を獲得したり、既存の行動パターンに熟達したり、あるいはそのような行動の変化を可能にするような内的過程を獲得したり組織化、再組織化したりすること」といわれます(『新教育学大事典』1990)。自らの思考・行動様式を変容させたり、学んだ知識を社会の多様な場面で有効に活用したりできるようになるためには、学習内容に対する深い理解を得るとともにそれを自己内面化することが前提となります。それには、学習者自身が主体性を発揮して学習活動に取り組むことが必要不可欠です。そのように考えれば、学習には能動的であることが本来的に要請されます。逆に、これらの発揮されない活動は、外形的な条件を満たしても実質的に学習とはいえない難いと言えます。そのため、「能動的学修」という用語は、同義反復に陥る可能性もあります。

にもかかわらず、このことばが最近改めて用いられている背景には、大学教育では、教員による一方的で知識注入型の講義が伝統的に主流であること、学生による主体的な取組を促進・支援する視点が依然として不十分であることへの反省ないし批判があります(近年は改善の取組も進んでいますが)。生涯にわたって学び続けることが重視される状況の中で、学習過程への学生の積極的参加を促すような教育のあり方が、強く求められています。(夏目達也)

SNSを活用する韓国の大学

客員准教授/韓国・全南大 柳志憲

eラーニングは、学習者や場所と時間の制約から解放する、デジタルデータを豊富に活用できる、双方向型の授業運営が可能となるなど、さまざまな可能性を秘めた学習方法です。韓国の大学では、1990年代の後半から、eラーニングを活用した教育がさかんに行われるようになりまし。さらに2000年代の半ばからは、韓国では携帯電話のメッセージ機能を用いて学習を促進する方法が広く採用されています。この機能は、

授業日程や教育活動を案内するツールとして用いられています。加えて、2010年頃からソーシャルネットワークサービス(SNS social network service)を活用した授業事例が増加し、フェイスブックやツイッターを授業に活用する事例が多く報告されています。SNSの活用によって、いくつかの効果を期待することができます。第一は、学習者が瞬時に反応できるという即時性です。ある意見を投稿すると、内容は

ただちに伝達・共有され、メンバーはすぐにコミュニケーションに参加することができます。こうした即時的な参与は、学生の社会的存在感を高めることにつながります。第二は、協同学習と学習共同体の形成を促すことです。学習グループを構成し、その中で相互作用を行うことによって、協同学習が促進されます。第三は、学生が自分の意見を表明することによって、自尊心を高めることにつながります。自尊感情が高いほど、学習の過程において、より積極的に参加することができます。第四は、学習グループ構成員の親密

性が増して、互いの情緒が豊かになることです。情緒的表現が増えると、学習活動を退屈だと感じなくなります。このように、SNSの普及は、授業運営や教育活動にさまざまな可能性をもたらしています。



る場面も記されています。また、就職活動の中で、自分とは何かを問いつめられ不安になったり、仲間の内定に対して複雑な感情をもったりするなど就活生の揺れる心情が丁寧に描かれています。対面上のコミュニケーションに加えて、裏アカウントを含むツイッター上のコミュニケーションの内容から、若者がどのように自分のキャラクターを使い分けているのかがわかります。ただし、ネット上のコミュニケーションは、年配の教職員に本書を読みにくくしている原因でもありますが。さらに、学生にも意味のある一冊とも言えるでしょう。本書は、現代社会を描いた小説として以外にも、就活対策書、自己啓発書としても読めます。年齢の近い筆者の文章は学生に大きな刺激を与えたいと思いますので、授業などで紹介してみたいかがでしょうか。(中井俊樹)

読んでおきたい この1冊

Great Books on University

『何者』

朝井リョウ 新潮社 2012年

本書は、就職活動を舞台にした若者たちを描いた小説です。平成生まれの筆者は最近まで就活生だったこともあり、若者の描写にはリアリティがあります。第148回直木賞受賞作であり、すでに文学作品としての書評も多数あります。そのため、ここでは大学関係者に対して本書を薦める理由を記します。

まず、就活生の視点から見た現在の就職活動の実態を理解することができます。エントリーシート、WE

Bテスト、面接などで学生たちがどのように苦労し、乗り越えていくのかがよくわかります。ESと略されるエントリーシートは企業が学生に求める独自の提出書類で、WEBテストは自宅や学校などのパソコンから受験する試験です。たとえば、「自宅でできるWEBテストはひとりでするものではない。そんなことは、就活生の中では常識になっている」と書かれ、試験問題を携帯のカメラで撮って2人で協力しながら解答す

高等教育研究センタースタッフ(2013年4月現在)

センター長	早川 義一	専門領域: 制御工学	研究員	東 望歩	名古屋大学高等教育研究センター
教授	夏目 達也	専門領域: 高等教育学、技術・職業教育論	客員	徐 国興 (中国・華東師範大学)	〒464-8601 名古屋市千種区不老町
准教授	近田 政博	専門領域: 比較高等教育学、学習支援		マシュー・ローレンス・オーレット (米国・マサチューセッツ大学)	Tel 052-789-5696
准教授	中井 俊樹	専門領域: 大学教育論、高等教育マネジメント		松下 佳代 (京都大学高等教育研究開発推進センター)	Fax 052-789-5695
助教	齋藤 芳子	専門領域: 科学技術社会論		松尾 睦 (北海道大学大学院経済学研究科)	E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
				秦 敬治 (愛媛大学教育学生支援機構教育企画室)	URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/